

WCRP おうえんプロジェクト for くまもと  
活動報告書

2019年5月

熊本県手話サークルわかぎ熊本グループ

## はじめに

熊本県には「わかぎ」という名前の手話サークルが、その地域名を付けて11か所にあります。これらが集まって熊本県手話サークル「わかぎ」を形成し、熊本県内の聴覚障害者の支援者として活動しています。

3年前の2016年4月14日21時26分、震度7の地震が発生しました。翌日15日は、屋内の割れ物などの後片付けに追われました。片付けの続きを16日にやろうと横になった時でした。家が岩礁に乗り上げたボートのように揺れました。これが熊本地震の本震でした。

16日の午後、熊本県ろう者福祉協会主導の元、熊本地震聴覚障害者支援対策本部（熊本対策本部と略称）が立ち上げられました。熊本対策本部の主導で、熊本県手話サークル「わかぎ」としても被災状況及び支援ニーズの把握のため2016年4月末～5月末に一次調査を実施し、2016年12月末から2017年1月には二次調査も行いました。

ただ、地域のろう者と共に活動する手話サークルと言いつつ、ろう者の本当に心からの気持ちを聞き出せているか、という疑問もあり、今回、WCRP

（世界宗教者平和会議日本委員会）の助成をいただき、あらためて熊本市在住の聴覚障害者対象の調査を行いました。その方法は、手話で尋ね、別のサークル員が読取り、それを回答用紙に記録するという形での調査です。手話モードだけの会話になると、雄弁に語るろう者がいたときいています。

この調査によって、今後の手話サークルのありようのヒントが得られたようですので、今後の活動の参考になれば幸いです。

2019年5月末日

熊本県手話サークルわかぎ熊本グループ会長  
青山寛六

## 1. 事業目的

熊本県手話サークルわかぎ熊本グループ（以下「熊本わかぎ」）には、昼の部と夜の部があり、夜の部は、熊本市内を4つの地域に分けて、北部、中東部、西部、南部で定期的な集まりを持っている。地域に分かれて活動するのは、手話サークル活動をろう者の住む地域に根ざしたものにするためである。しかし、熊本地震では手話サークルの会員宅も被災し、地域のろう者の支援が十分できなかつたという苦い経験をもった。

そこで、日頃、また災害時等に地域のろう者がどんな情報・コミュニケーション状態にあったのか、それを知ることによって熊本わかぎをはじめ手話サークルは日頃からどのような地域活動を行うべきかをさぐるために調査・研究を行った。

## 2. 事業実施内容

### 1) 調査研究のための委員会の設置

<委員名>

所属	氏名	摘要
九州ルーテル学院大学	西 彰男	心理臨床学科准教授
熊本市ろう者福祉協会	野田 尚子	手話対策部
熊本市ろう者福祉協会	内藤 宣夫	
熊本わかぎ	清田 富貴子	副会長
熊本わかぎ	小野 康二	副会長
熊本わかぎ	斉藤由美	事務局担当

<委員会の開催と協議内容>

	開催日	協議内容
第1回	8月10日	事業目的と委員会の役割の確認 調査方法について
第2回	9月14日	アンケート案についての協議 具体的な調査方法について
第3回	10月9日	アンケート調査実施状況の確認 調査を行う上での課題協議
第4回	12月11日	シンポジウムの開催について 内容、報告者の選定等
第5回	4月22日	事業の総括、報告書の作成について

<委員会の様子（熊本県聴覚障害者情報提供センター研修会議室）>



## 2) アンケート調査活動

10月3日、熊本市東部公民館でアンケート用紙（資料1）を使って集合方式でのアンケート調査を行った。調査方法としては、調査方法は、聴者とろう者がペアになり、個々のろう者に対して質問文を手話で尋ね、ろう者に手話で回答してもらい、それを回答欄に質問者が記述する方式を基本とした。そのほか、12月14日に熊本県聴覚障害者情報提供センターで、さらに各地域手話サークルの集まりで適宜個別に調査を行った。

## 3) アンケート結果

アンケート結果の詳細は資料2に示す。

アンケート回答者総数は28名と少なかったが、地域において近隣との情報・コミュニケーション状況を、熊本地震以前、地震直後、数か月後と分けて尋ねた。ほとんどの回答は、近隣とのコミュニケーションがほぼないことがわかった。熊本地震直後は一定の情報提供はあったが、その数か月後は元にもどっている。

ただ、地震前から近隣とのコミュニケーションが一定できていた人は地震直後、その後も含めて近隣から情報提供を受けていたこと、地震後開かれた地域での話し合いにも参加していることも分かった。

今後の地域との関係のあり方を尋ねた結果、近隣との付き合いは大切であるとほとんどの回答者が答えている。

また、手話サークル活動について、地域に聴覚障害者についての理解を広

げること、身近な場に手話学習の場につくることを望んでいることもわかった。

#### 4) シンポジウムの開催

2019年3月24日(日)、熊本県立大学小ホールで、今回の調査事業の報告とパネルディスカッションを加えたシンポジウムとして開催した。なお、この事業は熊本市ろう者福祉協会と熊本わかぎ共催で毎年開いている「熊本市耳の日ふれあい事業」の一環とした。

##### <シンポジウムの内容>

- ・報告「熊本地震についてのアンケート結果から考える地域活動について」  
報告者 小野康二氏(熊本わかぎ)

今回の、調査事業の目的、調査結果などをスライドによるグラフなどを用いて説明し、地域に根ざした手話サークル活動の必要性が語られた。

- ・パネルディスカッション(報告を受けて)

##### パネリスト

松本 弘樹氏(熊本市ろう者福祉協会会長)  
清田 富貴子(熊本わかぎ副会長)  
鳩野 浩次氏(熊本市社会福祉協議会事務局長)  
西 彰男氏(九州ルーテル学院大学准教授)

##### コーディネーター

小野康二氏(熊本わかぎ)

松本氏から、社会にろう者の理解がなかなか広がらないこと、それに対してどんな活動が必要なのか悩んでいると自分の生活を基に語られ、清田氏からは今回の調査事業に携わる中、手話サークルの目的をもう一度考え直すことが求められていると話された。

鳩野氏からは、社会福祉協議会とはどんな組織で何を行っているのかと共に熊本地震での被災者支援活動等が紹介され、聴覚障害者と地域生活のつながりをつくるべきだと話された。

西氏からは、障害をどう捉えるべきか、WHO(世界保健機関)の考え方がICIDH(障害分類)からICF(生活機能分類)に変わったこと、障害を背景(社会)との関係で考えることを、図等を使ってわかりやすく説明された。

参加者のアンケートは、このシンポジウム・パネルディスカッション

共に、とても良かった、または良かったと全員が回答していた。

シンポジウム後は、東日本大震災後、聴覚障害者の生活を追ったドキュメント映画「架け橋 きこえなかった 3. 11」(監督：今村彩子)が上映され、熊本地震から3年経ってしだいに薄れていく災害への認識を新たにさせた。

### <シンポジウムの写真>



#### 4) 事業を実施して（これからの活動について）

アンケートの結果、①多くのろう者が近隣とのコミュニケーションが疎いこと、②それが地震後の地域の支援に影響していること、③今後は近隣との付き合いの必要性を感じていること、④手話サークルに望むものは地域に聴覚障害や手話の理解を広げて欲しいこと、ということが分かった。このことから手話サークルの役割は自ずから定まる。言い古されたことばだが「地域に根ざした手話サークル活動」である。手話の学習はそれがそのままろう者の生活向上に繋がるものではなく、ろう者が暮らす地域でそれをどう使っていくかが肝心であり、原点に戻った手話サークル活動が必要だろう。

資料1

アンケート用紙

以下の質問に、該当するところを○で囲み、また必要に応じて〔 〕内に記入をお願いします。（記入作業は質問者が行います）

1.被災者（世帯）のプロフィール

居住地区（北区・中央区・東区・西区・南区）

性別（男・女）、年齢（ 歳代）

障害（ろう・難聴・盲ろう・その他〔 〕）

情報を支援してくれる健聴者と同居（有・無）

2.被災状況

（1）住宅の被災状況

（全壊・大規模半壊・半壊・一部損壊・被害なし）

（2）家具の破損

（ひどい・少し・ほとんどない・ない）

3.地震直後の生活の場

（1）地震が起きた後の1日～2日ぐらい、生活の場はどこでしたか？（複数回答可）

（自宅・避難所・親戚宅・知人宅・車中泊・

その他〔 〕）

4.日頃の隣近所とのコミュニケーション

（1）隣近所とのふだんのコミュニケーションを教えてください。

（よく話す、ときどき話す、挨拶程度、ほとんど話さない）

（2）隣近所とのコミュニケーション方法（複数回答可）

（音声・筆談・手話・身振り・その他〔 〕）

5.地震直後、近所の人（町内・隣保）との情報とコミュニケーションは？

（1）地震直後、自分から隣近所と積極的にコミュニケーションを取ろうとしましたか？

（はい・いいえ・その他〔 〕）

（2）地震の状況や避難先、食糧、給水等を教えてもらいましたか？

（はい・いいえ・その他〔 〕）

（3）（（2）で「はい」と回答した人に）どんなことを教えてもらいましたか？

[ ]

（4）地震直後、どんな情報が欲しかったですか？



[ ]

6.地震から1～2か月後、地域での話し合いの状況を教えてください。

(1) 隣保や町内会での話し合いに参加しましたか？

(はい・いいえ・その他 [ ])

(2) 罹災証明書などの手続きの説明を、近所の人や民生委員等から受けましたか？

(はい・いいえ・その他 [ ])

7.地震前と比べると、近所の人との付き合いに変化はありましたか？

(変わった・少し変わった・変わらない)

8. (「変わった・少し変わった」と答えた人に) どう変わりましたか？

[ ]

9. 地震前と比べると、近所の人や民生委員は、聴覚障害について理解を深めたり、配慮してもらえるようになったと思いますか？

(はい・いいえ・その他 [ ])

10. 近所の方などに、聴覚障害について理解や配慮をしてもらうためには、どうすればいいと思いますか？

[ ]

11. これからも災害等が起きることを考えると、近所の人や民生委員や自治会の役員等との付き合いは大事だと思いますか？

(大事と思う・少し思う・思わない)

12. (「思わない」と答えた人に) それはなぜですか？

[ ]

13. これからも災害等が起きることを考えると、手話サークルの地域活動にどんなことを望みますか？(複数回答可)

( ) 聴覚障害について理解を広めてほしい。

( ) 身近な所に手話の学習の場を作ってほしい。

( ) 一緒に地域の行事に参加してほしい。

このほか、手話サークルの地域活動として要望することがあれば、教えてください。

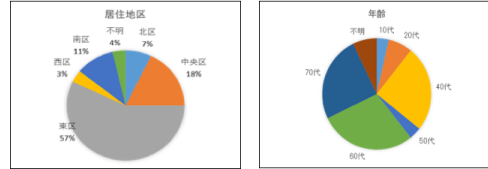
## 資料 2

### アンケート回答まとめ

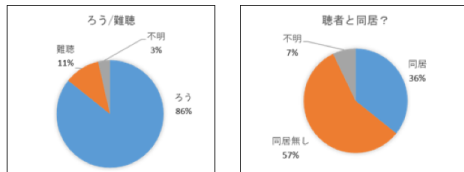
#### 調査方法と内容

- 調査対象: 熊本市在住の聴覚障害者(主にろう者) 28人
- 調査期間: 2018(平成30)年10月から11月
- 調査方法: 熊本わかぎで手分けし、ろう者宅を訪問し調査(予定)
- 主な調査内容
  - ・被災状況
  - ・近隣とのコミュニケーション(日頃、地震直後、1~2ヶ月後)
  - ・近隣の配慮の変化
  - ・近隣に聴覚障害を理解してもらうための方法
  - ・手話サークルに望むこと、など

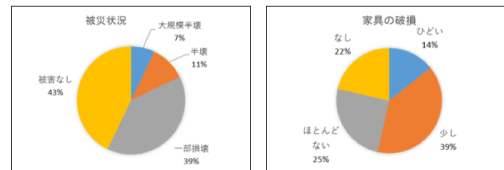
#### 被災聴覚障害世帯のプロフィール(1)



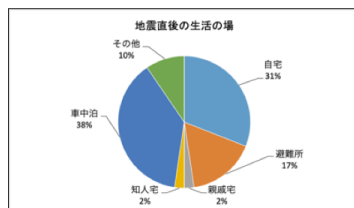
#### 被災聴覚障害世帯のプロフィール(2)



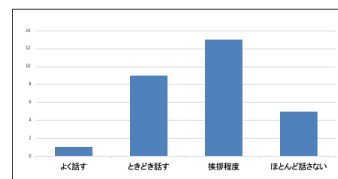
#### 聴覚障害者の被災状況



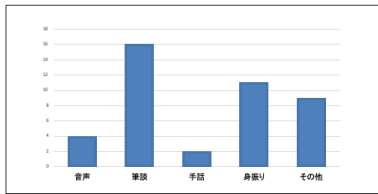
#### 地震直後の生活の場



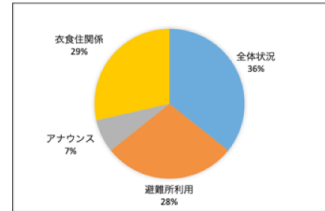
#### 近隣との、日頃のコミュニケーション状況



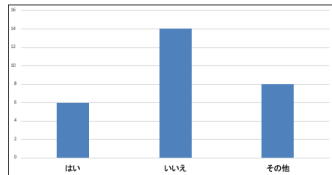
近隣との、日頃のコミュニケーション方法



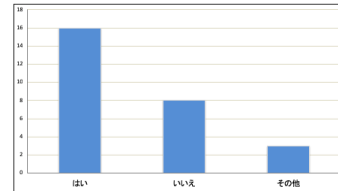
地震直後にほしかった情報



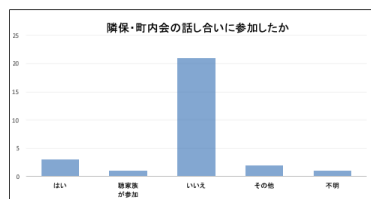
地震直後、近隣とのコミュニケーションを取ろうとしたか



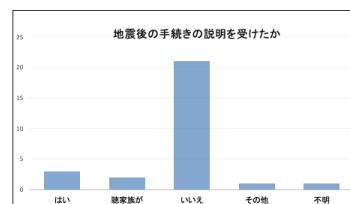
地震直後、近隣から情報をもらったか



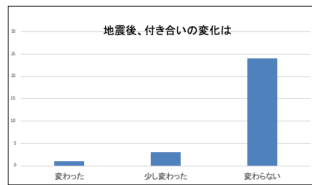
地震1～2か月後の近隣との関係(1)



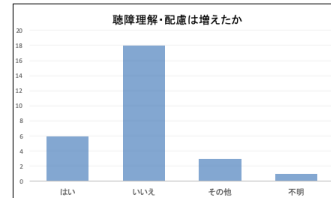
地震1～2か月後の近隣との関係(2)



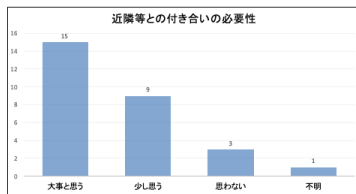
### 地震1～2か月後の近隣との関係(3)



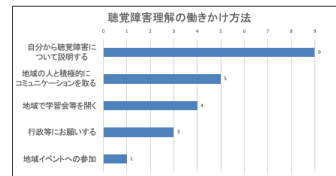
### 地震1～2か月後の近隣との関係(4)



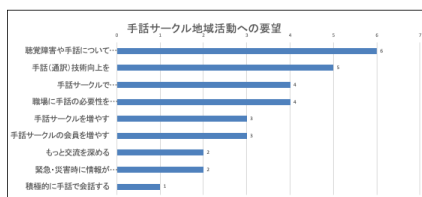
### 今後の近隣との付き合いの必要性



### 聴覚障害の理解や配慮のためにはどうすればいいと思うか

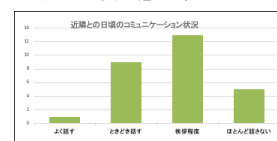


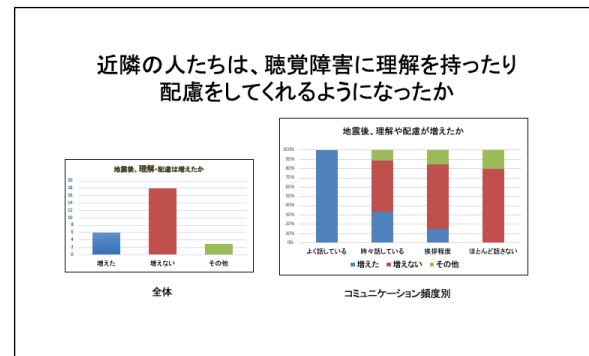
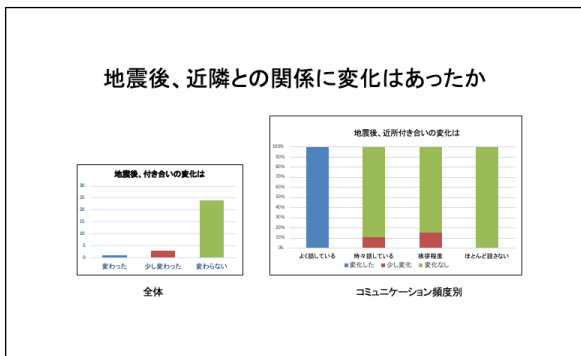
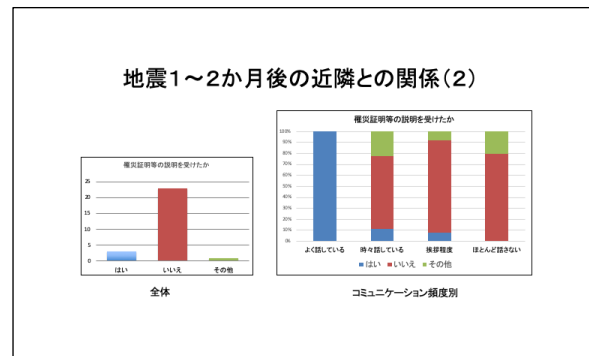
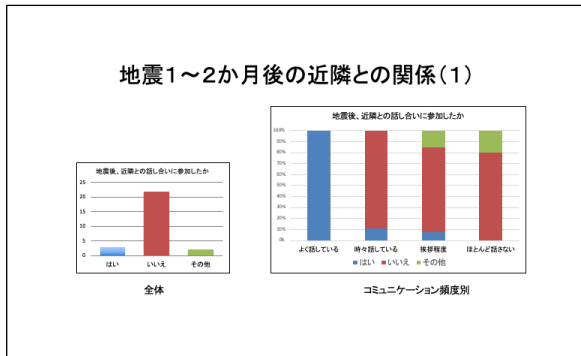
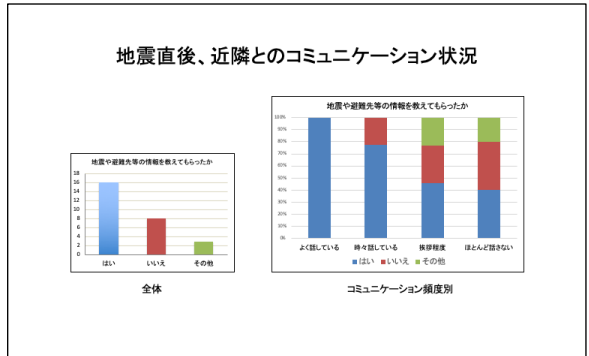
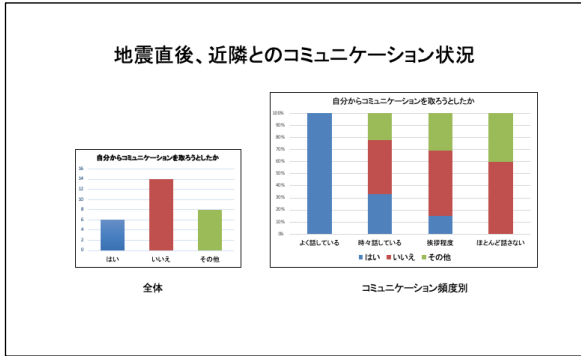
### 手話サークルの地域活動に望むもの



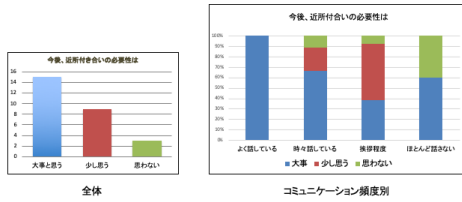
### 日頃のコミュニケーションのあり方と地震後のコミュニケーション状況

日頃から、近隣とよくコミュニケーションをとっていた人と、そうでない人では、地震後に近隣からの情報の伝達やコミュニケーション状況に違いはあったか？





### 近隣との付き合いの必要性



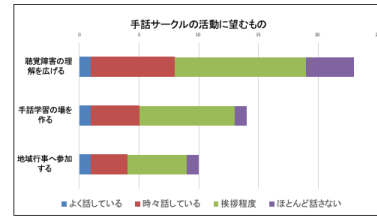
### 調査から見えてきたもの(1)

- 聴覚障害者は、ふだんから近隣とのコミュニケーションは疎い。
- 地震後も積極的に近隣の人から情報を得ようとしていないし、隣保や自治会の話し合いにも参加していない。近隣の人も積極的に情報を提供することしていない。
- 結果的に、地震後も近隣との関係に変化はなく、特別配慮が増えたわけでもない。
- ただ、今後また災害が起こることを考えると、聴覚障害者として近隣との付き合いは大事だと思っている。

### 調査から見えてきたもの(2)

- 一方、回答を日頃のコミュニケーションの頻度別に見てみると、もともと近隣とのコミュニケーションをよく取っていた人は、地震直後も近隣から情報を得られたし、関係もよくなり理解や配慮も増えたと回答している。
- 付き合いの程度と、近隣の支援(共助)は比例する傾向にある。
- ただ、近隣との付き合いが少ない人も、今後は付き合いの必要性を感じている。

### 手話サークルの地域活動に望むもの



メ モ